

◇ 楼阁建築・重層階建築 などの発達。～ 前記述の高床住居や高床穀倉が発生発達して、軸組をがっしりとした箱のようなもの。(板倉、校倉(あせくら)造り、井籠(いりご)組)が発展し、一階ずつの軸組を積み重ねた形式でつくられる様になった。この様な構造はそれぞれの階が十分な重さがあり、がっしりとした軸組が箱のようにしている必要がある。地震や台風に耐え優れている。例として室町時代の金閣や銀閣寺である。

また、三重塔、五重塔、なども同じで、しかし高さが高い為安定性を持つ(心柱)・(振り子柱)をたてる。また室町時代の末期頃に発達した城郭建築や民家建築で二階または三階建があらわれてくる。通し柱と胴差を用いた実用的な二階建構造が生みだされた。軸組架構法が発達し、(渡り臈構法)・(民家型構法)、などがでてくる。

◆ 日本建築の特徴～(遠近手法)

◇ 外観意匠に大きな役割りをもっている。

- 屋根勾配に付いて。～ 遠近によって勾配を変える。
- 軒・傍軒などの出に付いて。～ 遠近によって出を変える。(化粧桁、化粧垂木、枝外垂木、軒先化粧材、など木材寸法や間隔を変える。)
- 屋根面・棟などに付いて。～ 反り、弛み(撓み)(たわみ)、照り、腫り(むくり)。
- 屋根の出隅に付いて。～ 隅木の寸法や出に変化がある。
- 破風板など、外部の仕上げ材の寸法。

◇ 内観意匠に付いての考えかた。

- 各種化粧材に付いて。～ 自然材の使いかた。(丸太、変木、竹材、その他の雑材、など。)
- 柱に付いて。～ 化粧柱の面の取りかた。
- 内法材に付いて。～ 敷居、鴨居、長押、足立束、柄束、吊束、などすべては柱との寸法関係や使用ヶ所で、バランスを考える。
- 天井材に付いて。～
- 建具に付いて。～ 建具位置に付いて、建物外まわりは柱真を建具真とする。建物内部は鴨居真(ひばた真)、とし建具戸首は主部屋側とする。また建具の見込みは建具の大きさによって変化する。